

令和4年度第1回岐阜県総合教育会議 議事録

1 開催日時及び場所

令和4年7月1日(金) 10時30分 ~ 11時35分

岐阜県庁舎 4階特別会議室

2 出席者

知事 古田 肇

教育長 堀 貴雄

委員 稲本 正

委員 野原 正美

委員 竹中 裕紀

委員 村上 啓雄

委員 市川 祥子

3 関係者

文学座演出家 西川 信廣

俳優 竹下 景子

4 オブザーバー

清流の国推進部長 長尾 安博

副教育長 矢本 哲也

5 陪席

教育次長 小野 悟

義務教育総括監 香田 静夫

清流の国づくり政策課長 村田 直也

教育総務課長 関谷 英治

6 議事録

別紙のとおり

## 議 事 録

発 言 者	発 言 内 容
清流の国 推進部長	<p>これより岐阜県総合教育会議を開催する。</p> <p>本日の会議はペーパーレスで、お手元のタブレット、モニターに資料を表示する。タブレットは、カーソルかマウスでのスクロールにより操作いただきたい。</p> <p>本日は、「豊かな人間性を育む教育の推進について」を議題に進めていく。また、本日の出席者については、次のページにある配席表により代えさせていただく。なお、稲本委員、野原委員については、ウェブでの参加となるので、よろしく願います。</p> <p>それでは早速、議題に入る。「演劇ワークショップの取組み」について、副教育長から説明をお願いします。</p>
副教育長	<p>私のほうから、「演劇ワークショップ事業の概要」について、説明する。</p> <p>お手元のタブレット資料1をご覧ください。このワークショップ事業を導入した背景としては、価値観が多様化し、かつ、社会構造が大きく変化する現代社会において、社会参画に必要なコミュニケーション能力が求められる一方で、高校教育の現場では、学業や対人関係に行き詰まりを感じる生徒や、日本語能力が必ずしも十分でない外国籍生徒が多く在籍しているという状況がある。こうした中、生徒のコミュニケーション能力や自己表現力の向上、ひいては自己肯定感の醸成などを目的として取組みを開始した。</p> <p>このワークショップでは、生徒たちが高等学校という新しい環境に適応し新たな人間関係を構築する、その手助けとなるように、高校1年生を対象として1回あたり2時間程度の活動を、年3回実施している。具体的な活動の様子については、この後、動画をご覧ください。</p> <p>続いて、資料2をご覧ください。これまでの導入実績をまとめたものである。平成24年度に東濃高校で取組みを始め、平成29年度に本日会議に参加いただいている西川様が所属する文学座と県教育委員会が連携協定を締結し、更に、取組み</p>

の効果の浸透とともに着実に広がりを見せている。直近の令和3年度においては、県立高校63校のうち約20%に相当する13校において実施、生徒数ベースでは、県立高校の1年生全体の約10%が体験している。学校数比率に対して体験生徒数比率が少なくなっているのは、このワークショップが比較的規模の小さな高校で行われているためである。なお、この事業は、当初は全額県費で取り組んでいたが、平成29年度以降は文化庁の事業として採択され、国の支援も得ながら実施している。

続いて、資料3に入る。この事業の取組みにより、生徒の自己肯定感の向上や周囲への配慮が以前よりできるようになるなど、様々な効果が期待されている。グラフは、ワークショップを実践している県立高校（ここでは仮にA高校とする）の状況をお示ししたものの。ワークショップを導入以来、生徒の様子に変化が見られるようになり、年度により多少の増減はあるものの、全般的には中退率や遅刻回数が減少傾向にあることがわかる。

続いて、資料4をご覧ください。ここでは実際に参加した生徒及び教員の感想と、ワークショップ後のアンケート結果を示している。生徒の感想には、「他者との接し方や自分の感情を表現する方法を学ぶことができた」とか、「失敗を恐れずに挑戦していきたい」といった、前向きな感想が多くみられた。また、教員からは、「指導する立場として生徒への声の掛け方や注目のさせ方が勉強になった」という意見や、「新しいことにチャレンジしようとする生徒が増えた」といった感想が挙がっている。いずれにしても、ここにも具体的な効果が示されているものと受け止めている。

最後に、資料5をご覧ください。「課題」と「今後の展望」について示している。課題としては、まずは全体状況として、生徒を取り巻く環境が大きく変化するのに伴い、生徒の直面する課題も一層多様化・複雑化しており、そうした中で、学業や対人関係等に行き詰まりを感じる生徒が多くいるということが挙げられる。

加えて、今般のコロナ禍によって、他者と関わりをもつ機会が減少、あるいは関わり方が変化といった新たな課題も生じている。

これらの課題には学校のみで対応することが困難である場合も少なくないことから、学校は今後一層、外部との連携を進めるとともに、外部からご支援をいただき、そのような関係性を深めていく必要があるのではないかと考える。そこで例え

	<p>ば、近隣の小中学校や特別支援学校で勤務する教員など、より多くの教員が体験して日々の教育活動に生かせるようにするなど、演劇ワークショップの取組みを一層充実させてまいりたいと考えている。</p> <p>それではこれから、昨年度、恵那南高校で行われた演劇ワークショップの実際の様子を映像でご覧いただき、事業概要の説明を終わらせていただく。</p> <p>【演劇ワークショップについての映像を視聴】</p>
<p>清流の国 推進部長</p>	<p>続いて、文学座演出家の西川信廣様、俳優の竹下景子様から、「演劇的手法を取り入れたコミュニケーション能力の育成」についてご講演をいただく。西川様には「演劇ワークショップ」で主任講師を務めていただいている。また、竹下様には、先ほどVTRでもご覧いただいた、恵那南高校でのワークショップにご参加いただいている。それでは、西川様、竹下様の順でお願いします。</p>
<p>西川氏</p>	<p>今見ていただいた資料の中にもあるが、ワークショップを最初に始めたのは平成24年の東濃高校で、12年間、岐阜県下で高校のワークショップを受け持っている。コミュニケーションというと、なんとなく抽象的で、よく「コミュニケーションが大事」ということが使われる。学校でやっているのは、もうちょっとわかりやすくいうと、繋がりをつくるということ。生徒間の繋がりがなかなかうまくできないという中で、きっかけを作ることが基本だと思う。あと、先ほどの資料にも出ているが、学校が生徒たちの居場所になるというのがひとつの目的だと思っている。わかりやすいからコミュニケーションというが、繋がりをつくったり、居場所をつくる、きっかけをつくるというのが、私たちの役割かと思う。</p> <p>堀教育長から依頼があり、最初に始めた時、ちょっと衝撃的だった。普通、高校生を集めて「ワークショップやるよ」と言うと、大体20人も教室に集まると大抵は膝を抱えて座る。最初の高校の時は、「こっちきて」と言って集まると、部屋に集まった3分の1が床に寝る。それが彼ら彼女らの状態だった。「ゲームをやろう」と言うと、まず言うてくるのは、「ダメダメ」とか「ムリムリ」とか。でも僕らは演劇をやっているんで、俳優や若い子の目を見ればわかる。これちょっとやりたいとか、興味あるなっていうのがわかるから、それをピックアップする。それで、さっきご覧になったようないろんなゲームをやっていくと、助手（スタッフ）もムキになってやる。助手には僕は手を抜くなど、とにかく本気でやれといっている。</p>

さっき映像で間違えたのも助手なんだけども、そういうことをやりながら生徒間で、段々弾けてくる。そうすると、さっき横になっていた生徒が起きてきて参加してくる。これがかなり、僕らにとってはびっくりした反応だった。

それをスタートとして、段々にプログラムを考えて、基本的にはさっきご紹介したゲームをやっていくが、例えば、さっきの映像でやってなかったゲームを紹介すると、「タコハチ」というゲームがある。さっきやっていた「ピンポンパン」というのは、顔だけで「ピン」と隣に言うと、その人が「ポン」と隣に言う。そして3人目が「パン」と離れた人に飛ばす。するとその人がまた「ピン」と始める。非常に単純なゲームだが、つつい「ピン」「ポン」「パン」と隣の人に言ってしまう。それで大笑いになる。硬かった態度が段々打ち解けてくる。「タコハチ」というのは、簡単なゲームで、例えば、僕が竹中さんのほうに向けて、体で「1」とする。そうすると隣は、体で「2」とする、次に「3」と言って戻ってくる。そうすると、次は「4」となるが、「4」は体だけで言うてはいけない。「1, 2, 3」で黙ってなくちゃいけない。それでまた「5」に、「6, 7, 8」といって、最後に「タコハチ」と言って、また戻る。ただこれだけのゲームだが、どうしても「4」を言ってしまう。それで、間違えた人に僕らが言うのは、ゲームだから間違えるのはよくないが、演劇の場合は果敢にやって間違えるのはOKなんだと。さっきの資料にもあったが、そういうことを生徒にやらせると、最初はびびっている。間違えてもいい、間違えたときに面白いのは、我を忘れてやるから、ちょっとかわいかったりとか、おかしかったりとか。そうすると、それが他の生徒や先生方から見て、意外とあいつあんな表情するんだとか、あんな明るいところがあるんだということを、お互いに発見してもらおう。それが生徒間の繋がりを作っていく。それがアンケートでも出ている。

もうちょっと内容的なところに入ると、最初に生徒に何でこんなことやるのかを説明するが、演劇にとって大事なものは集中力、そして解放すること。僕らが集中するというのは、雑音のあるところで自分の勉強、仕事に集中する、遮断する集中だけど、演劇の場合は他者に集中する。相手に、ないしは自分がいる場に集中する。その集中力を磨くんだと。対話はそうしないと成り立たない。大事なものは他者であり、自分のいる場に集中する。かつ、そこに緩やかに自分を解放する。自分を解放するという事は恥ずかしいこと。下手すれば笑われてしまったり、馬鹿にされるんじゃないかという不安があるから開かないけれども、ちょっと自分を開いてやる

と、相手は逆に言いやすくなったりとか、新しい自分を見てくれるようになる。ちょっと緩やかに開いてやることも大事であり、これでコミュニケーションが円滑になる。それと同時に、想像力が豊かになる。

SNSの話だけれども、SNSでは「元気？」とLINEを送ったら、「元気」と返ってくる。これは便利だなと。SNSは信じちゃいけないと僕は言う。情報交換としては便利だが、普段会っている時に、「おはよう」と言って、「おはよう」と言われたときに、「あれ、昨日のおはようとちょっと違うな」と感じたりする。目の動きとかから想像する。そういうのを感じたときに、「今日大丈夫？なにかあったの？」と言う。それで「ちょっとね…」みたいな話になって、そこでひとつコミュニケーションになる、支え合う、そういうことが必要で、そのために、他者に対する集中、それから自分自身を開くことが必要だということを言って、さっきのゲームを進める。

一番大事にしているのは、ゲームの中で、ちょっとでもうまくいったら褒める。普通は大抵褒めないけれども、この演劇ワークショップでは、自己肯定感がなかったり、承認欲求が満たされていない子どもが多い。そういう子どもたちに、たまたまゲームだけれども、ちょっとうまくいったときに、僕はすごく褒める。ただ、嘘はつかない。あんまりやってないのに、「よかったよ、よかったよ」という言い方は、彼らはもちろん敏感で、上手くいってもないのに褒められたりすると、「何だこいつ」と思ってしまう。だから、確実に、ほんのちょっとでも能力を褒める。一生懸命やった子には、負けても失敗しても褒める。失敗が次に繋がるということをお話しながらゲームをしている。助手や竹下さんをお願いしているのは、どうしても大人だから、わかりやすくやってやろうとすると、彼らは甘くやってくれていることに対しては、あんまり好感を持たない、むしろムキになってくれと、そうすると、まともに相手してくれていると思う。竹下さんも、よく間違えるんですけど、でもそれでいいですよと。間違えたりすると大喜びする。それで段々場の雰囲気良くなっていく。

あともう一つ、学校によっては、先生も入っていただく。最初の頃は、先生方とお話ししたり、先生だけのワークショップをやっていた。ある時から、高校によっては担任の先生とか新任の先生にも必ず入ってもらう。すると、生徒たちは先生が入ると、今までの教員と生徒という関係が少し、距離感が縮まる。もちろん先生も

間違えたり、先生も果敢になってやるので、それで生徒は大喜びする。一番面白かったのは、ワークショップで先生が「吉田」と名前を書いた。そしたら、生徒が「吉田」と呼び捨てで呼んで、先生が「おい、吉田はないだろう」と言って。そういう会話がふっとある。あと、生徒によってはヤンチャな生徒もいて、僕も指輪をしたりしているから、休憩時間になると、僕のところに来て「チャラいじゃん」とか言ってきて、でもその子もピアスとかをしているから「お前チャラくないのかよ」って言うと、「あ、そうだね」みたいなことを言ったり、意外とフランクになれる、その場では。僕らも「何かを教えます」という感覚よりも、一緒に何かこう新しい出会いをしていこうと。

昨日は恵那南高校、その前は華陽フロンティア高校に行き、学校によってタイプは違うけれども、恵那南は2回目だったので、あとで竹下さんからお話があるかもしれないが、1回目より随分明るくなった。恵那南に最初に行った時、のどかだから問題もなく見えたけど、実は色々と問題を抱えている生徒がいるということを聞いて、確かに、どこの学校もだが、一見穏便に見えて、生徒の中では色々と問題を抱えていることもある。

それと、僕らは東京の総合芸術高校でも請け負っており、イベントなんかをやっている。ここは特に役者になりたい子どもたちが20人位いるところで、そこではコロナの影響がすごく大きく、感染防止上制限されている中での付き合いだったので、特に3年生は、この間特別公演をやったがなかなかまとまらない。大体今までは3年生は一気にまとまるけれども。だから岐阜の高校生たちもこの2年間は、今まで以上に、人との繋がりだったり、直接対話をしたり、あと表情もなかなか見えない、なかなかうまくコミュニケーションをとれない状況が続いたのかと思う。ただ、1年生の時に今の3年生はワークショップをやっているなので、比較的それが有効に働いているかもしれない。

あと、このワークショップによって、直近では、生徒たちの繋がりづくりや先生との距離を縮める、学校が生徒たちの居場所になるということだが、資料の数字に出ているように、中途退学者がすごく少なくなっている。無事に高校を卒業する子が多くなっている。ということは、やはり理想として、うまくいけば、地元の企業に就職して、家庭を持って、子どもをつくって、納税者になる。ところが、中途退学をしてしまうと、なかなか就職が難しかったり、お話を聞いたところによると、

コミュニケーションがうまくできなくて、職をどんどん変えてしまう。そうすると生活も苦しくなって、最悪のパターンは受刑者になってしまう。納税者になるのか受刑者になるかというのは、地域社会にとってすごく大きい。これは岐阜だけじゃなくて、全国的に言えることだと思う。色々と先生たちや親御さん、関係者の方とも話をするが、演劇と教育がタッグを組んだ、子どもたちへのワークショップは、単にコミュニケーション能力が上がるというだけではなく、地域社会に貢献する人たちをつくる。そういう意味では、もっと広がっていけばいいのかなと思っている。

これだけの規模でワークショップをやっているのは岐阜県だけだと思っている。部分的に地域の演劇人が高校で教えたり、演劇志望の人に教えているケースが多いが、岐阜県のように演劇志望ではない人に教えているケースはすごく少ない。数から言っても、岐阜県が一番多い。文化庁もこの数字にとっても注目してくださっていて、これが岐阜モデルのようになって、全部を文学座でやるわけにはいかないだろうけれども、これに近い事業を文化庁の支援により始めており、そこは障がい者、高齢者とか、もっと小さい子どもなどを対象にしている。それが今、皆さんご承知のように、ソーシャルインクルージョン、社会包摂的な事業ということで、いろんなところで使われている。以前、文化庁は社会包摂的な事業だというと、それはうちの庁ではないと、文化庁は文化だと。だから演劇は、立派な作品を作ることが第一の課題で、社会包摂は別の議論だと言っていた。最近、2年前くらいになって、社会包摂のことも言い始めて、文化庁も支援してくださった。岐阜県にきちんとしたデータ、エビデンスがあるので、これを積極的に出して、岐阜県でこれだけの成果が上がっていると。もちろん岐阜県内でもより広がることもとてもいいことだし、全国的に一つのいい例である。まだまだ、状況が変わったり、コロナでこんな風になると思ってなかったから、変わっていくこともある。生徒たちの中でも変わっていく部分もあると思う。ただ、人と人とは繋がっており、人間はなぜコミュニケーションをしているのかというと、本来は弱い存在だったのが、言葉を発見し、コミュニケーションすることによって強い立場になって、地球の頂点に立ってきた。これは最初に生徒にも言うインパクトを与えるエピソードだが、イスラエルだったと思うが、子どもが路上に捨てられていて、その子どもを取り上げて、政府の機関で無菌室に入れる。それでちょっと残酷だけど、子どもが泣くとミルクを与える。子どもが泣くとおもちゃを与える。それを続ける。ただ、あやしたりは一切しない。そうしたら子どもは死んでしまった。ということは、もしかしたら赤ん坊



	<p>はコミュニケーションなしでは、命を失ってしまうことがあるのかもしれない。最近、コロナ禍もあって、世の中でいろいろな、想像を超えるような事件、例えば突然人を刺してしまったり、電車に火をつけてしまったりとか、そういう人たちがどういう状況かという、大体は社会との関係を断っている人たち。仕事を失ってしまったとか、人間関係がうまくいかなかったとか。社会との関係を断ってしまったことで、孤立してああいう事件を起こしてしまったというケースがある。ということも含めて、いかに人と繋がるか、社会と繋がるということが大事かということ、ワークショップをしながら付け加えて、コミュニケーションの意味というものをより理解してもらおうと思っている。説明が足りない部分もあったかと思うが、こういうことをここ10年くらいやらせてもらっている。後ほど、何かご質問があればそれにお答えする。</p>
竹下氏	<p>私は、日本大正村の三代目村長をさせていただいている。その関係で、西川さんから、以前、明智町にある恵那南高校で、演劇ワークショップをされているのを伺ったのが平成31年だった。西川さんが演劇ワークショップを始められてから数年経った時、ちょうどその年の秋に可児市で、「移動」というお芝居があり、その演出が西川さんということもあって、度々お話をしている中で、「そういう試みがあるのだったら私もぜひ参加させていただきたい」と、私の方からお願いをして、半ば無理やり参加させていただいた。</p> <p>明智町は大変のどかで、名古屋から出かけて行っても程よい距離で、みんなが温かく迎えてくれる、そういうところにある高校で、何が起きているのかということも気になった。何よりも、子どもたちは未来の大きな財産でもあり、希望でもあり、そういう子どもたちになにか私ができることがあればと思って参加した。先ほどの映像をご覧になって皆さんおわかりかと思うが、皆さん本当に、西川さんを先頭に講師の皆さん、手を抜かずに、一生懸命一緒にゲームを作っていた。私はそこで、こんなできない大人もいるんだよっていう、むしろそちらの方の見本。学校で会う子どもたちから見る大人というのは、まず、正しいとか、指導する立場だとか、いかにも見本である大人たちが多いと思うけれども、ゲームはそれとちょっと違った視点で子どもたちと向き合うもの。助手さんも一生懸命やるが余りに失敗もする。私自身、演劇ワークショップというものを経験せずに、現場から一つ一つのことを覚えて今に至っており、私にとってもすごく刺激的で、</p>

こんなゲームがあるんだと。シアターゲームというのも、恵那南高校の生徒と同じタイミングで覚えた。

演劇ワークショップへの参加は、スケジュールが調整できたときに限られるが、今年で4年目になる。私から見れば、もう孫世代の子どもたちが本当にかわいくて、最初に行った時に、恵那南高校は、対象になっている高校の中でも特に小規模校だという話を堀教育長から聞いており、今年は、約20名、男の子も女の子もいるが、私が参加した当初は、本当にみんな恥ずかしがり屋さんで、声も小さく、私たちとなかなか目を合わせてくれなかった。でも、西川さんのお話にもあったように、ゲームが楽しいので、段々みんな打ち解けて、勝ち負けではないけれども、やっぱり、自分が一生懸命やって、それで褒められたりすれば嬉しいし、ちょっとミスして、ゲームから外れれば悔しいし、そういうところでどンドン、その場が温まって行って、子どもたちも楽しんでくれているというのが表情でわかるようになった。

周りを見回しても、のどかで、そんなに問題を抱えている子どものように私は見えなかったけれども、一人ひとりを見てみると、片仮名の名前のお子さんも多く、例えば言語の問題であるとか、学力の問題、家庭の環境など様々で、スムーズにコミュニケーションが取れない子どもたちがいるということが、だんだん私の中でもわかってきた。特に今、子どもたちが少なく、色々なところから通ってくる。特に1年生で1学期の頃は本当に心細そうにしていると思っていたが、それが去年あたりから大分変わってきて、人数は減ってはいるけれども、最初から、明るく出迎えてくれるぐらいの感じになった。多分、先輩からこんな楽しいことがあるよというようなことを聞いているのか、演劇ワークショップで、成績がつくわけではないということもあるのか、本当に楽しみに待っていてくれる様子がある。私は俳優という立場で日頃仕事をしているが、別に私のことは子どもたちは全然知らない。家に帰って誰かから聞くことはあるかもしれないが、普通の、多少セリフを言ったことがあるおばさんくらいに思っているんじゃないかと思うが、そういういい年の大人と一緒にあって、笑ったりこけたりなんかしながらやっているってということが、子どもたち自身の、自分を発見する、再発見するきっかけになったりとか。また、友達が「タコハチ」とか、一生懸命やるからちょっと面白い形になっちゃったりとか、そういうのを屈託なく子どもたちが笑う、そう

	<p>ということでどんどん雰囲気良くなっていく。</p> <p>そして、最後のまとめの話の中では、西川さんのお話にもあった、コミュニケーションがいかにか大事かということ、自分のことだけではなく、自分と違う他者を理解するよう努力する、想像することでわかり合う能力というものを磨いていく。そういうことの大切さをお話になる時に、子どもたちはうなずいて、うん、うんと言ってくれている。そういう反応を見ると、とてもうれしくて、「また7月くるからね」と言うと「おう」みたいな感じで見送られた。</p> <p>こういった事業は短い期間で答えが出るわけではないと思う。先ほどの遅刻や中途退学の子どもの数、目に見えて結果が出ていることは素晴らしいことだと思う。家庭での人間関係も含めて、子どもたちがこれから社会に羽ばたいていくときの、本当の根っこの部分の大切な力を磨いていく貴重な時間になっているように思う。こういった事業が必要とされている子どもたちのために、私からも事業が拡充されていくことを望んでいる。子どもたちはすごく反応力、可能性があるので、ぜひよろしくお願ひしたい。</p>
<p>質疑応答</p>	
<p>竹中委員</p>	<p>コミュニケーションの勉強は私もしたことがなかったが、演劇の場合、どこからスタートされるのか大変興味深かった。ゲームから始めるということで、何種類かやってみると、意外と自分が表現できる。恥ずかしさがなくなってくるということもあるかと思う。このステップはゲームで大体終わりなのか、コミュニケーションの進度によってゲームから何か先に進められていくのか。</p>
<p>西川氏</p>	<p>ある高校では2年生や3年生からの要望があり、1年生のあと、2年生の希望者、あと3年生は全員やりたいという。卒業してしまうので全員でもう1回やりたいと言われたこともあり、やったこともあった。その時は、昔やったものと同じゲームを思い出のゲームとしてやって、あと、新しくもう少しステップアップしたゲームをした。例えば、「愛してる、嫌い」というゲームがある。高校生を2人組にして、男性の方が、女性に「愛してる」と言って、その言葉が本当に心に響いたら女性が「私も」って言う。でも響かなかつたら「嫌い」って言う。そうすると、男子生徒</p>

	<p>は、必死になって、土下座したり、大きな声を出したり、目を真剣に見るとか、そうすると女子生徒はあんまり「嫌い嫌い」と言っていると辛くなる。6回目くらいになって、女子生徒が「私も」って言うと、男子生徒はすごく嬉しそうな顔をする。その時に僕は、「言葉というのは、相手を傷つけることもある。それから受入れられるとこんなにうれしいことはない。今は仮でやっていて、本当に付き合っているわけではないけど、それでも心が動くよね」って話をする。言葉の持っている力。あともう一つは危なさ。だからちょっとステップアップしたことをみんなでやるというのもある。</p>
<p>清流の国 推進部長</p>	<p>意見交換に入る。これまでの取組みを踏まえ、「自己実現や人間関係の構築に必要な能力の育成」や「コロナ禍における他者との関わりの機会の確保」、「今後のワークショップの展開」といった観点から、ご意見をいただきたい。</p>
<p>意見交換</p>	
<p>市川委員</p>	<p>最初に高校生がゲームをして何かが変わるのかと思ったが、西川さんのお話をお伺いして、ゲームをすることが目的ではないということがとてもよくわかった。私は高校生の娘がおり、学園祭などで演劇やダンスをすることがある。進学校なので、頭の中では、どうしてこれをするのか、目的はわかっている。しかし、自分たちがわからない世界が動いたり、人と触れ合うことで見つかる、感じるということは、本当に大切なことだと思う。これは実際に、小学生とか中学生から体験することが大事ではないかということも感じた。</p>
<p>西川氏</p>	<p>小学生も中学生もやっている。例えば、ひとり親家庭を対象としたワークショップをしている。お父さんかお母さん、お子さんがきて、お父さんが参加するゲームだったり、お母さん、子どもたちが参加するゲームをする。保育園児は難しいけれど、小学生になると大体できる。そうすると子どもたちも、一番喜ぶのはお父さんやお母さんが失敗すること。一緒にやっていると、自然に親子の交流ができてくる。プログラムの内容さえ相手に合わせてやれば、十分に使える。実際、このように劇団では小学生へのワークショップもやっている。</p>
<p>稲本委員</p>	<p>コミュニケーションがなぜ大事かということについて、人類史の中で、ホモサピエンスがネアンデルタール人に勝ったが、遺伝子の中には少し残っていると言われ</p>

ているものの、ネアンデルタール人が絶滅してしまったのは、結局コミュニケーション能力がホモサピエンスより劣っていたからだと言われている。コミュニケーションの重要性を周知するためには、科学的根拠を先生たちに浸透する努力がまず必要だと思う。それから2番目、小学生と高校生はやっぱりコミュニケーションの仕方が違う。それから、海外の人とのコミュニケーションになると、また別のレベルがあると思う。今グローバル化して、子どもでも海外とコミュニケーションをとったりしている。

織物でいうと縦糸に対して横糸がコミュニケーションという気がする。その横糸によって、どういう柄の織物にしていくか。そういう将来的なことも踏まえて、頭に入れながら、今やってることは大切なことだと思う。コミュニケーションがよくなないと民主主義も成り立たないし、教育も成り立たないと思う。すごく大切だけど、今の学校教育の中にちゃんと定着させるためには、縦糸と横糸というポイントを持って、どういう模様にしていくかということまで考えていただくとよい。

最後に、もう一つは、これはいわゆる全人教育に繋がる。今、民主主義でも一番大切なのは、一般的なプロパガンダみたいに、段々とある方向に行ってしまうとまずい。それをリベラルアーツというか、全人教育的なものにするためには、コミュニケーション能力との関係がすごく重要だと思っている。それら3つのことを頭に入れて、より発展していただくと嬉しいと思う。

村上委員

私は昭和58年に医師になり、当時は誰に教えてもらうというものではなく、自分で覚えなくてははいけなかった。特に、とにかく患者さんに、最新の診断技術とか治療を提供しなくてははいけない。そういう病気を診るという立場で修行をして、十数年経った。その間には、我々が患者さんの最期を看取らなきゃいけないとか、最期になると、最新の診断技術、治療技術を振りかざしても、役に立たないということに気付くようになった。まさに病気を診るのではなくて、病気になった人を診るということに気付いていく。

そこでどうしたらいいかと思ったところで、大体私が40歳くらいの時、平成10年に、初期臨床研修医の指導医講習会という、今ではほとんどの医者が受けなければいけない講習会があった。4日間、名古屋の金山のホテルに宿泊し、毎日のように、メディカルコミュニケーションの技術をトレーニングするという経験をした。そこで今言ったように、人を診るということでの課題を見つけ、やはり傾聴と共感

という言葉が大きく学んだ。例えば、癌の末期で、痛みが強くて、その方の病室に出向いて我々ができることはもうないと思うのではなく、その患者さんの言葉を聞いて、手当をして、手に触れて、そういったコミュニケーションが重要だなということに気づいた。

その後、これはやはり自分たちの後輩に、もっとしっかり教育しなくてはいけないということで、私は感染症が専門で、コロナの対策もしているが、地域の医師を集める地域枠というようなこともやっており、地元で輝ける医者を育てる上で、講義とか技術だけではなく、メディカルコミュニケーションがしっかり身に付いた医者を育てようということで、模擬患者の会をつくった。俳優さんではないが、うちの病院の患者さんで手を挙げてくださる方がたくさんいらっしゃったり、職員のご家族で自分が癌を経験したみたいな方もいらっしゃって、そういった方、100人くらい集まって、模擬患者の会をつくって、医学生の比較的低学年のところで、臨床実習が始まる前に、癌の告知だとか、すごく取り乱す患者さんだったり、すごく横着な患者さんだったり、いろんな患者さんを演じていただき、どのように対応するのか、本当にその患者さんの言葉に傾聴し、共感した上で色々と提案できるかということに取り組んできた。

そこでやっぱりそういう経験がないので、もう少し大学に入る前の段階で、すべての高校生にこういった経験ができるといいと思っており、今日見せていただいたことは、すべての先生方もこの数字を見れば、取り組んでみようというモチベーションにもなると思う。高校生の10%ということだが、やはり全ての高校でも、全員、少なくとも1回は、低学年の時にやってみるというように展開していければいいと思う。

竹下氏

村上先生のお話を伺っていて私もなるほどと思った。私たち俳優は、演劇というものを通して、その中の人間関係において、他者にどれくらい共感できるかということを中心に課しながら、具体的に演技で表現していく。演劇を通して一番私が日頃感じているのは、その劇場で発信するだけではなくて、そこに観客として入ってくださっているお客様と一緒に初めて完成するのが演劇の本来の姿だと思っている。観客の人たちがただ傍観するのではなくて、私たちが演じているその世界をまさに追体験するというか、共通の体験として経験して帰っていただくことができれば、表現したその作品が一番輝く時だと思い、それを信じて演技をしてい

る。そのことは、一言で言えば、やはり、村上先生がおっしゃった、共感力、エンパシー。シンパシーではなく、これからの子どもたちに一番身に付けてもらいたいのは、私は共感力だと思う。演劇のこういった簡単なゲームを通して、自分を発見することでもあり、同時に自分とは違う他者を意識することでもある。この多様性の世界の中で、非常に面倒臭くもあるけれども、簡単にコミュニケーションと言っても、子どもたちはいろいろなケースに晒されているので、コミュニケーションを取るのに、最初はどうしても神経質にならざるを得ないのが今だと思う。それは社会に出て行ったら、もっと神経質にならざるを得ないシーンに晒されていく。その前に、学校という場がひとつのプラットフォームになって、自分がこうなんだよというのと同時に、周りにもこういう人もいるんだということを認識した上で、コミュニケーションがスムーズにできるような、本当にこのワークショップは、ひとつのきっかけづくりに過ぎないと思うけれども、そこで子どもたちが発見することがとても大きいと思う。そのことを、周りの大人たちも、ぜひ、大切にしていってほしいと思う。

このような不寛容になっている世界の中で、本当に求められているのが、この共感力、エンパシーだと思う。稲本さんのお話を伺っている中でも、そういったことを第一に、大事に考えられることが、大人たちができていけば、子どもたちにとってももう少し住みやすい世界が開けていくのかなと、ぜひそういう未来になって欲しいと思う。

野原委員

私は不破高校と、東濃高校で実際にこの授業を拝見したことがある。それぞれの学校の生徒の置かれた状況は違っており、不破高校は西濃地方のほのぼのとした雰囲気の中の高校。東濃高校は外国にルーツのあるお子さんがたくさんいる中、まだうまく理解できない生徒も多い中での授業だった。受け手の生徒も学校によって、多種多様という中で、本当にそれぞれのタイプの生徒さんに合わせて授業をやっていただけていることに、本当に頭の下がる思い。

昔であれば、兄弟が多かったり、地域に行けば、近所のおじさんおばさん、または近所のいろんなお子さんたちとふれあいながらコミュニケーション能力も自然と醸し出され、熟成されたという時代背景があったと思う。今はやはり少子化で、家庭に帰っても1人っ子または2人。2人だと双方向しかない。せめて3人いれば最小の社会が形成されると思うが、そのような中で、こういう演劇ワークショップ

	<p>のような、手を差し伸べる、敢えてつくり出していくことにより、家庭や地域ではできないことをできるようにしていく取組みは、本当にこれから大切になってくるということを感じる。特に最近コロナ禍になって、リモートで授業を受けたりとか、画面で先生と他の子どもたちと顔を合わせることはできるんですが、やはり体温だったりとか、目を見て、その子の様子、先ほど竹下さんがおっしゃった共感力、画面からは決してそういうものが伝わってこないと思う。そうした状況の中で、こういう事業の持つ重みはこれからもますます大きくなっていくんじゃないかと思う。</p> <p>また、こういうゲームをどこかでやってみてと言うのもなかなか難しい。生徒さんの状況を見ながら判断して、言葉をかけるとか、そういったことにもかなりスキルが必要なんじゃないかと思う。これは本当に西川さんや文学座の俳優さん方の能力に助けられているところだと思うが、少しでも岐阜の中で、足元にも及ばないかもしれないが、ちょっと真似事でもできるような、そういった教員の育成だったりということも、これから考えていけたらいいのではないか。</p>
竹中委員	<p>私は長いこと営業をやっており、その中で外国人と徹底的に違うのは、日本人は言葉では喋るけれども、顔と身体が付いてきていない、言語だけで喋っているというか。表現力としては、まずい、気持ちを通じ合わない。野原委員もおっしゃったように、これからはオンライン教育やテレワークが増えていく中で、コミュニケーションの基本的な、喜怒哀楽の表し方というか、いろんな共感力を持つということを教育にも取り入れていかないといけないと思う。</p>
西川氏	<p>竹下さんから共感という言葉があったので、今ベストセラーになっている、お読みになった方もいるかもしれないが「スマホ脳」という本がある。スマホがいかにか脳に悪い影響を与えるかということが書いてある。スティーブ・ジョブズも自分の子どもにスマホを与えなかったと聞く。その本に、対話をすることによって、ミラーニューロンという物質が脳から出ていると書いてある。そのミラーニューロンという物質は共感を生む。対話がいかに大切か、対話がなかなか難しい時代の中で、何かミラーニューロンが出るようなことを、色々なことでやるべきだということに繋がってくる。このワークショップもさっき言ったコミュニケーション能力を培う場でもあるし、別の言い方では、共感力、対話をすることで共感が生まれるという</p>



	<p>ことも自然に体験してもらえていると思う。</p> <p>もう一つ、演劇をやっているのだから、演劇の宣伝になるが、もし対話ができない場合に、ミラーニューロンが一番でるのは観劇と言われている。芝居を観ると、対話をしていることと同じ。生徒にも言っているが、英語で「audience」とは、聴衆という意味。演劇は観るといっても、実は対話し、ある種そこで交流している。目に見えない会話がある。演劇の方もぜひご支援を。</p>
<p>教 育 長</p>	<p>本日はありがとうございました。途中でお話があったが、私は平成24年度に、東濃高校の教頭として始めたのがこの演劇ワークショップである。西川さんとのつき合いも、11年目を迎え、こんなふうに変化するという意味では当時は思っていなかった。ただ、ずっと思っているのは、やはり先ほどグラフでも出ていたが、当時、ちょうど私がいた年に、全校生徒の41%に当たる、121人が学校を去っていくという、そうした状況を目にすると、一人ひとり学校を去っていく時の、その辛さとか、彼らの思いや家族の状況を考えた時に、やっぱり彼らはこの先もずっと、日本の中で、または外国人も多いので、フィリピンやブラジルで暮らしていく中で、彼らに何とか、この18歳までの間に、自分自身が認められる経験ができればという思いでずっとやってきた。</p> <p>そしてよく言われることだが、予算協議の時も、事業開始後3年目であれば、ノウハウが蓄積され、教員が指導者の立場を代替できるでしょうという話がある。私はそれに対していつも言うのは、プロのピアニストの横に3年ついていたら、教員がプロのピアニストのように弾けるのかって言ったら、全然そうじゃないってこのと同じ。本当に、西川さんを始め、竹下さんもそうですが、来ていらっしゃる俳優の方々にはプロであり、私たち教員では、絶対にこの人間観察力は真似できないというか、子どもたちのちょっとした表情から見抜いて、彼らに対してちょっとした表情を与える。その姿というのは、やはり私たち、普通の人間ではできない部分だと思っている。そういった点で、教育が、今、働き方改革の中で、いろんな外部の支援と言うが、こうした教育とは異なる、プロ集団、いろんな方々と、こういう教育に入ってきていただいて、一緒になって、将来を担う、僕は一人ひとりの人間、子どもだと思いますが、彼らが将来生きていくために、何とかやってあげられることはないのかという意味で、教育と他の分野との連携、お互い寄り添って、お互いのいいところを見せあいながら、子どもたちを将来に向かって送り出していくとい</p>

	<p>うことが必要だと思う。</p> <p>先ほどからいろんな方々の応援もあったが、今後もこうしたことは続けられればと思う。これは、対象校の一年生全員が受けているというところが一番大事で、希望者じゃない。そういった意味で、すべからく子どもたち、県民全体がメリットと、恩恵を受けて社会に出てほしいと思っている。</p>
知 事	<p>この総合教育会議は、いじめとか学校内の事故とか色々な課題に対して、学校内だけで処理できるかどうか、その場合、学校教育を狭く考えないほうがいいのではないかとということで、本来ならば半独立している教育委員会と、知事部局と呼んでいるが、県庁の様々な行政課題を担当する部局とが一緒になって連携して教育を考えていこうという場。そういう意味では、今日のテーマはまさにこの会議にふさわしいものだと思う。</p> <p>お話を伺っていて、1回2時間で、1年に3回ワークショップをやることによって、中退率が減ったり遅刻が減ったりとか、はつきり結果が出ている。サクセスストーリーをたくさん聞かせていただいた。西川さん、竹下さんをはじめ、これに関わってみえる方がいかに素晴らしいか、いかに工夫を重ねておられるかということだと思う。これを岐阜モデルとしてさらに広げていきたいと思うが、その場合、どこまでもお2人に頼りっきりになるわけにもいかないの、一つは方法論、メソドロジーとして体系化、具現化する。いろんな人が学べるようにまずメソドロジーを整理していただいて、それでこれに参加する教師に伝える、さらにはマネージする人も育てなきゃいけない。今後岐阜モデルとして大きく全県的に広げていくとすればそこが大事かなと感じている。ワークショップを3回やればおしまいということではなく、岐阜モデルとして積極的に継続して磨いていければと思ったところ。</p> <p>演劇ということでは、私どもの立場でいうと、行政や政治において、役割、演技、パフォーマンス、それからコミュニケーションというのは、不即不離の関係にある。特に今日のようにコロナを始めとして、危機管理、クライシスの中で、市民、県民の皆様とどういうふうにコミュニケーションを続けていくか、そして理解や共感を得ていくかということをや日々痛切に考えさせられている。</p> <p>いずれにしても、演劇的手法を取り入れたコミュニケーション能力の育成を通じて、自分の居場所の発見、他者との距離感の短縮、社会包摂、共感力（エンパシー）</p>

	などがしっかりと進んでいるというサクセスストーリーを様々な聞かせていただいた。岐阜モデル形成に向けて、これを大事にしていきたいと思う。
清流の国 推進部長	それでは以上を持って、岐阜県総合教育会議を終了させていただく。 本日はどうもありがとうございました。